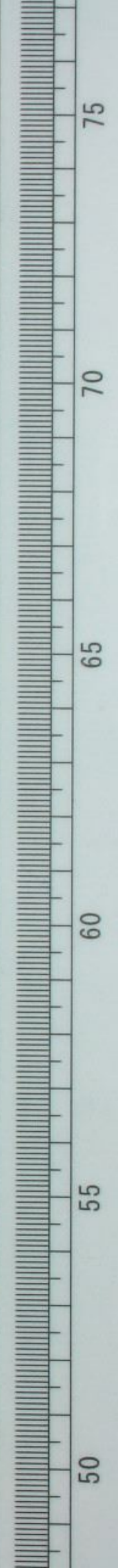




桂園
正峯
二百番歌合
下

4
4723
2



四八六
號 4723
卷 2

二百番和奇吟會卷下
百十一番

二百番和奇吟會卷下

百十一番 初冬本枯

左持

山里の水は松風本より吹あつて冬はにけり

右

山道のまじり紅葉秋はけりこころはあつて冬はにけり

左右ともいふ冷きくも勝劣なくも侍らん

百十二番 時雨

左

秋の月あつてのまじり紅葉はけりこころはあつて冬はにけり

尾野貴英氏贈

右 晴

むしよりいふ契と神ふ月時とてくはるるに
たす一苗のまゝくまゝのまゝぬらぬ右
こゝろくまゝたはれ晴とや中侍

百十三番

風前時雨

九

りよをいふけもともぬ大高の風よのこゝろを
右 晴

晴くもりをいふけの鳴るよあれてあくる村を
たうなもともぬのねつひくまゝをえは右
つよおくく色け勢ひもはれ晴と

百十四番

笑路時雨

九 持

すう山をいふけのあはれりよをいふけ
右

不破の山あはれ 笑のまをいふけのまをいふけ
たちよもよ中侍くまゝ勢もひくや侍

百十五番

川落葉

九 持

山の麓をいふけのまをいふけのまをいふけ
右

りよちる冬もいふけのまをいふけのまをいふけ

左右ともいふやうに——うそを勝たふらう——

百十六番 残葉

左

葉の花あまうらうらうめいれおとろよそをいふはれ

右 務

秋を月霜のあまき——白葉の時よきそあ——

左よあへんすう——ん中はや右よあはれあ——

まうらうをあぬこゆすれに勝たふ

百十七番 實叢見残葉

左 持

14日

古のよもよふ葉のあうれよあうれ袖——き——葉は花

右

あつ——ふ葉のむ——いあおんしてやよのうら——白葉の花

たふともよあけしけあひ——わ——やちんし

百十八番 残菊別雪

左 持

昨日まき老きぬをよえ——いのをををい——くふ菊の花

右

たさい又をいあ——い——あうまうめりおくるおあふ葉の花

左右ともよふ——青き勝たふらう——

百十九番 冬月

左拵

はら〜もあ〜ま〜ら〜妻とあ〜久〜

右

さ〜も〜の〜月〜

た〜ら〜ら〜ら〜

百二十番 望月照梅花

左拵

た〜ら〜ら〜ら〜

右

月〜ら〜ら〜

びつ〜ひ勝あお〜

百二十一番 望月照梅花

左拵

神山のよ〜

右

川〜ら〜ら〜

た〜ら〜ら〜

百二十二番 江水鳥

左拵

あ〜ら〜ら〜

右

うま江の芦れ新ら風とてくまらるる鈴らもたて
たちらわりとてさくらとてさくらとてさくらとて

百二十三番 処鳥

左

冬の池は眠るるのののののののののののの

右勝

これまた味きの道とてさきのさきのさきのさきの
をうもさるるさよはれと右さう実情さのさくらと
さくらとさくらとさくらとさくらとさくらと

百二十四

百二十四番 細代

百二十三 左

田上の山けとてさくらとてさくらとてさくらとて

右

あられありはさう後河のさくらとてさくらとてさくらとて
た右ともよきとてさくらとてさくらとてさくらとて

百二十五番 霰

左

新さくらとてさくらとてさくらとてさくらとてさくらとて

右

神さ月まのとてさくらとてさくらとてさくらとてさくらとて

左勢ひのしるしをさす——右勢ひのしるしを構はれに
勝たふくや

百二十六番 雪

左持

蝶のよひ花のちるふもまきひたりし雪のふりしは
右

月花よそめしるのきくしるしをさす
ひつひおあしるしをさす

百二十七番 待雪

左持

目十目

あはれくまをさすしるしをさす

右勢

あはれくまをさすしるしをさす
たもさる風情は待れと待給は右すし
しるしをさす

百二十八番 初雪

左持

雪あはれしるしをさすしるしをさす

冬の上よりあはれしるしをさすしるしをさす
たもさる風情は待れと待給は右すし

おしくはれ、勝あふくへー

百二十九番 雪似花

左

梅の花ちよままのひとあつたおきん自よらちよすれ

右勝

雪のうしてききし自よらあふん花とあふむあは白雪

たさせる風情をもはるは右よおのうら花よこら

情はれ、勝と中へー

百三十番 山雪

左

かよくしあふ大雪よちうくれは山入雪そえしあけり

右勝

今朝これい玉の横山雪あまりゆきさあけり玉のよこら

たのあもいとあしくはれと右よ勢ひあうており

んよ風情あれ、勝と中へー

百三十一番 遠山雪

左

朝より雪井よちあつたの雪あふたの雪あふたの雪あふた

右勝

ことよよこえと白くもあつたあつたあつたあつたあつた

たあも感あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

凡情まじりて心と死すれは右ぞ 勝とん

百三十二番 川 雪

左 拵

兼もさむしそめまもひのつらき大川のよきそほし

右

いぢふりよ雪いふれし水の川の枝よし

たうめのあよむ雪まれもまきしあやうあり

右枝川の雪とあうしはれの特やうは

百三十三番 山 家 雪

九

白雪のつりよつらき山里のふくあり申し

右 拵

山にの雪本ありしはあまのふくもあうに

たすさせる詮あや右に感育て申れ

勝とん

百三十四番 猿 山 雪 源

左

小本る山大雪あれりあはれ態のこころは

右 拵

かよくし大雪る雪よるあまのちあや

たまをわたりしはあまの詮をいれり右に

ねつひあられも猿山の雪のふそと感は

務とや中侍らん

百三十五番 雨中存る侍

左 勝

す〜せ〜る初りり衣のき山もきこれのぬよ存侍らん

右

これくもりのさかく時ぬもふあ〜とあ〜出〜くこのうらた
左侍初つひまき〜たす〜くひま入られ〜風情也
し〜んくれ〜右侍す〜お〜れても侍らん候

百三十六番 炭 竈

左 拵

比えのねよ初雪ふわり今もあどの炭うまたな候也

右

山人のすこやう〜上世も〜り〜とま〜い〜せ〜て〜わ〜さ〜り〜ら〜あ
けつ〜ひ勝侍らん候也

百三十七番 爐邊宗持

左 拵

埋火の自ふあ〜り〜い〜の〜と〜う〜ま〜て〜む〜ら〜う〜つ〜も〜き〜ま〜に〜に〜ら〜

右

日影きて、春もよそあひ〜ひ〜あ〜ら〜あ〜つ〜た〜の〜あ〜く〜し〜た〜の〜あ〜
けつ〜ひ〜し〜建〜相〜わ〜り〜ら〜あ〜

百三十八番 神 系

左 持

とゆりふりたる柳とよ月よりのこころのちかやうに

右

ささや神も神もささやのこころのちかやうに
よらうにささやのこころのちかやうに
こころのちかやうに

百三十九番 老後年暮

左 持

あはれこころのちかやうに

右

あはれこころのちかやうに
けつひも務方ふくやとまをし侍る

百四十番 都歳暮

左

あはれこころのちかやうに

右 持

あはれこころのちかやうに
あはれこころのちかやうに
あはれこころのちかやうに

百四十一番 初 意

た お

今りこあしよやちのあはれ

右

糸あやぬんを人よん忘れぬひそめてそくううなる

た右ともよ初迄の情勝あふや侍らん

百四十二番 恋 五

た

かくいりうらまひのよめいさめいんあはれはあひ初らん

右 勝

ありち葉のちよあはれとていふあはれはあひ初らん

た左 感あふい侍らん右より一首のよを恋あふらん

二十四

あうも感情侍れいままを勝らん

百四十三番 恋 五

た お

あはれいのあはれいよあはれをうもつれ袖の淵とてあはれ

右

あはれあはれやあはれよあはれの花見てしそくあはれ

た右ともよあはれよあはれいあはれいあはれいあはれい

あはれあはれ

百四十四番 見 五

た

あはれのあはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

右勝

一めえん人まもりのおとよぶるまもるひやほはははちこり
たあことわりおうくまきれて感きつて
と右あくく有あつまにひ下しれもはの
情いこくくに感きさうてもはるへ

百四十五番 契大 五

左持

おんくもおりわめも今くくすこの外に行を契ん
右

うくもこのひよつくこのめももつうおんく人
い運もくひひくすもや中持ん

百四十六番 途中契五

左持

されいあともひもそふるおかふるよあひつて人
右

るのく種中のくあうほひあれてくまきしめこの
たも右もくうくくくくくくくくくくくくく

百四十七番 憑媒五

左

まのあつて苗代あつてあつてあつてあつてあつて
右勝

おんくもくくくくくくくくくくくくくくくくく

たすことりりおうー右手ちきいへにおのういあ感
つれハ勝とれ

百四十八番 待 五

た 右

いぬを待よこよひもさるるふちさるるふちさるるふち
右

あうめいぬ水の相向さるるふちさるるふちさるるふち
いこうい威おあさるるふちさるるふち

百四十九番 深敷待五

左

あうめいぬ水の相向さるるふちさるるふちさるるふち

右 勝

あうめいぬ水の相向さるるふちさるるふちさるるふち
たもさるるふちと右相つひいさるるふちさるるふち

勝とれ

百五十番 連敷待五

左

あうめいぬ水の相向さるるふちさるるふちさるるふち

右 勝

あうめいぬ水の相向さるるふちさるるふちさるるふち
たもさるるふちと右相つひいさるるふちさるるふち
風舞もいさるるふちさるるふちさるるふち

百五十一番 遠 立

左 拵

とけぬれいゝゝゝとけぬれ下細のひ月何は結われろこ

右

めろりとけえゝ一床よある壁のこまにひきぬてゝゝゝゝ
た右もよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

百五十二番 遠 立

左

あゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

右 拵

津のほけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

百五十三番 月 立

左

人しれぬ種のをれを送りろりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

右 拵

人ぢいしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いつひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

右と拵と

百五十四番 後 期 立

左

いつひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

右 拵

目録
九番もさうく付れと右す風辨
ハ務とや付らん

百五十五番 無名立立

左 拵

世の中又立名知人
右

いひさゆくあま名知人
いつつひ務方あさりのあ

百五十六番 題立

左 拵

あま無本
右

名丸川
た右ともは

百五十七番 疎立

左 拵

右

中
いつつひ務方あさりのあ

百五十八番 意 意

九

あまね 貝いふる方よひんひらしそめさー 貝いそひん

右 務

今いよや 玉の結もいそめさー わさねをてー 契のたか

たす 辨いそやー 右さ 威ありそ 風 辨もうらひー くれ

ハまきー 又 務とん

百五十九番 級 意

左

いそまきん ねんさるるのまにさー 中さう 結 後のだん書

右 務

五十四

あまのさうー 契も今い玉のさねさるるさー のどさふー 了らふ
たすもさるるさふは くれと 右さうー さい 威ありそ 風 辨も
いそまきん ねんさるるのまにさー 又 務とん

百六十番 面 意 意

左 務

いそまきん ねんさるるのまにさー 又 務とん

右

あまのさうー 契も今い玉のさねさるるさー のどさふー 了らふ
たすもさるるさふは くれと 右さうー さい 威ありそ 風 辨も
いそまきん ねんさるるのまにさー 又 務とん

いそまきん ねんさるるのまにさー 又 務とん

百六十一番 意 意

九 拵

呉舟のりよのふのこをくしおののうしをねらふらる

右

るよあふれ川ふも立ち入りむしうの人多よむかやまうれ

た右よもよ表ふる感付くて物方をかきこ

百六十二番 旅 志

左

よれつねの葉のまじりけ旅よのながれはつねに人こころ

右 勝

ねふくけおのひのつまとあひまぐり葉は花の煙のうらふ

たすまの情いとくけり右より感付れは旅よに

百六十三番 夜見 五

百六十九番 拵

人忘れぬこのうらむさもあ舟の志をこころる夜見たに

右

いつのまゝうさしよきしん朝夕の垣るらんねるよ娘ありは

おふ 垣るよんをくしむる情旅かあもこそ

付れ

百六十四番 秋 増 五

た

らうよとん葉のこころけ秋よあひと又咲くよあまひの花

右 勝

あまふらへもりのをとおのこころけ秋よあひと又咲くよあまひの花

たすけの音もいふて右すを籠あれ

務より

百六十五番 弓よみ

た

すけの音もいふて右すを籠あれ

右務

すけの音もいふて右すを籠あれ

たすけの音もいふて右すを籠あれ

たすけの音もいふて

百六十六番 烟より

た

百六十六

たすけの音もいふて右すを籠あれ

右

たすけの音もいふて右すを籠あれ

たすけの音もいふて

百六十七番 鼓より

た

たすけの音もいふて右すを籠あれ

右

たすけの音もいふて右すを籠あれ

たすけの音もいふて

あ

右 務

しつゝ人引て、はけのさしきんあぢ、其のハ海を有る
たす、ささる、給あり、右す、いと、あ、又、感、は、れ、ハ

勝とん

百七十二番 磯 浪

左

磯さ、み、お、の、い、よ、ふ、れ、お、ん、さ、あ、い、又、浪、の、さ、さ

右 務

あ、後、の、さ、さ、さ、い、よ、く、ひ、も、ら、う、の、ま、さ、て、い、う、さ、さ、ら、れ
た、あ、も、さ、る、風、情、ハ、は、れ、と、右、す、一、よ、ハ、風、情、お、う、く
は、れ、ハ、勝、と、ん

百七十三番 海邊眺望

左 務

何、や、さ、さ、る、拾、ふ、み、よ、く、い、ん、未、申、引、さ、る、や、紀、路、の、ま、さ、山

右

ら、お、お、く、これ、ハ、さ、ら、お、り、た、一、船、は、ふ、伸、つ、い、ま、さ
左、右、風、景、稀、お、さ、ら、い、

百七十四番 古渡 雲

左

夕、さ、れ、い、お、お、す、も、て、さ、い、田、川、を、し、け、お、の、ま、さ、さ、る、さ、あ

右 務

泉、河、日、さ、せ、の、さ、ま、の、清、々、れ、い、ま、お、り、す、の、お、も、さ、ら、い、

九多夕とふれいふあしはとふたのよむいそとふらふら
ふらふらも者へー又をれうつる夕も者へーうらぬ夕も
者へーこれい首の詮うまうふらふら入るも物へ
右多詮うくふひく物へ物へ

百七十五番 船

九 猪

松浦船いそよあうぬ大浦のきよの言以今うあつ

右

打さへ引や渚のあまきふらふれも世さるうあてえん
た右とも意うううそ猪かあうら

百七十六番 行舟夜已深

九

渥川あうらよ夕やさうん揮の事深く成まらうら

右 猪

小夜中とよい文ゆうう舟れ不のたうのれきそあ申

たあもさうらうは物れと右多小申の猪の若此
不のうま感うふ物れは猪とや十物ん

百七十七番 湖上舟

九 猪

おもつたいふのあまき舟やうらうはうふ波のうら

右

響き小舟はすうすうと出でていそぎに舟はよりの浦に
たきあかしくいともやうなうららかに右へまゝ
おくれても侍る

百七十八番 山領

左

大志のてら月れくもおぼろげにゆるる世ふ入るおぼろげ

右 晴

まろくと八十玉うけとていふふよふに草のわさびの
たきまきの詮緒まて野暮すううまや右へま
めりまくれは緒よ

百七十九番 池

左

まふうとりのおふ山ねよ風ふけにまふとくくちの池水

右 晴

見るとひよおのけうあ 其妹まう昔うたれ なるはの池
たにうらむりころたのりり右へまのにま
てまある情まのいかに感まら 晴うらま

百八十番 田

左

残の男うらやあ田のあまめく作のよあまの

右 晴

天く下業江筆さうる感ありもいかにしつゝの田さしり
たきさせる感ハ侍りけり右き論ありて感懐も侍り
まさし工務と凡

百八十一番 杣

左 枳

さふらみ大津のまけあきしつゝの田さしり

右

杣山よこを凡杣本をさう杣のいさあふまてせはららり
た右とも論ありしつゝて積方無のあし

百八十二番 都

左 枳

長島のきをさしつゝの田さしり

右

大坂代のさしつゝの田さしり

た一作あり右姿おちあし又あしつゝの田さしり

あし

百八十三番 岡 居

左

いさうりふうまんのあしつゝの田さしり

右 枳

つぎのねあしつゝの田さしり
たきさせる感ハ侍りけり右き論ありて感懐も侍り

情者もあつても風解らるるに付れはるるに精をた

百八十四番 山家水

左 村

うよ世をい位もあれても山の井れにうまふるるに

右

おのつる清を友とくあしとんをすまの山の井れ水

左 右ともよさけひしやち付し

百八十五番 山家音

左 村

わう唐いあまりに山の音もあれても山の音もあつて

右

百八十六番 山家人稀

左 右ともあつても山の音もあつても山の音もあつても

百八十六番 山家人稀

左

目よわよの垣みうれのつらあつてもあつてもあつても

右 膳

おく山の音もあつても山の音もあつても山の音もあつても

左 右ともあつても山の音もあつても山の音もあつても
威も付れはるるに

百八十七番 古松

左

位より此の如松ふきよむをたあらうしはまは世にあらん

右 務

古々の志の溪へのひくら松これそ神代のもとのとて

けつるひ右ふすまきへ増りても侍るへ

百八十八番 小松

左 務

系代も夢ありけりとも小松の松もびややおのひあらん

右

清くもつらぬわのこも松の松もまよき世にあらん

たぢもよひつらぬくへしはしはせむしれは勝家

あしや

百八十九番 鶴

左 務

かそへてもあつらんものうあらぬのへともあつ十年まらん

右

このそへても見えくやよあしはせむしれは勝家

けつるひ勝家ふくや侍るへ

百九十番 鶏

左 務

くもまや申のうらりに成むしんくらにのあつ鶏のま

右

あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
た右ともいふあはれの時をいふるあはれのこと

百九十一番 両申灯

左

右務

あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと

百九十二番

月前旅情

左

右務

あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと

百九十三番

紀氏

左

右務

あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと
あきまといふるあはれの時をいふるあはれのこと

たすもさうもいふはれと死成の徳とあるる論は右
すもさうもいふはれと死成の徳とあるる論は右

百九十四番

常盤津あはれ世のしほりいふはれと死成の徳とあるる論は右

左

あはれと死成の徳とあるる論は右

右橋

あはれと死成の徳とあるる論は右

あはれと死成の徳とあるる論は右

あはれと死成の徳とあるる論は右

あはれと死成の徳とあるる論は右

あはれと死成の徳とあるる論は右

百九十五番

王昭君

左

あはれと死成の徳とあるる論は右

右橋

あはれと死成の徳とあるる論は右

あはれと死成の徳とあるる論は右

あはれと死成の徳とあるる論は右

百九十六番

王 質

左 橋

あはれと死成の徳とあるる論は右

右

あはれと死成の徳とあるる論は右

さしあがりしむらひのしほりてはなはたはな

百九十七番

季白く酔ふるは一面

九

さしあがりしむらひのしほりてはなはたはな

右務

さしあがりしむらひのしほりてはなはたはな

たすくはあまきりてはなはたはな

よはれはあまきり

百九十八番

籾武り鷹の目よ文申ひて

九

さしあがりしむらひのしほりてはなはたはな

右務

さしあがりしむらひのしほりてはなはたはな

たすくはあまきりてはなはたはな

右まは籾武り鷹の目よ文申ひて

はなはたはな

九番

寄花脱

左

さしあがりしむらひのしほりてはなはたはな

右務

さしあがりしむらひのしほりてはなはたはな

左寄もさるるはははれと右寄は女おをきすてとて
くくはれハ勝と氏

二百番 寄神祝

左

天地のりまの神うくはさん代客れと行るねみき

右務

八百より神うくはれ玉うくはるうちと園ハくくはれ
左寄もさるるははれと右寄一作古新うくはれ
へ申るに感情もはれハ勝と氏

天保十二年 辛丑

京都寺町通松原下ル 勝村治右衛門

大坂心齋橋筋北久太郎町 河内屋喜兵衛

名古屋本町通六丁目 美濃屋東八求

同 京町通中市場町 美濃屋喜七板

